

潮音寺だより

第306号
平成21年4月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

choonji@aichi.email.ne.jp



【語意】心静かに瞑想し、真理を観察すること。

禅
定

河津桜とメジロ

撮影：超空正道

心静かに
仏法の声を聴け

静寂は
安心を育む
智慧の揺籃

喧騒は
不安怖れからの
一時の忘却

喧騒の中に
身を置くなかれ

喧しい
轟しい
轟しい

五月蠅い
騒々しい
騒がしい

般若波羅蜜 ⑥ 禅定

禅定という語は、サンスクリット語 dhyāna (ディヤーナ)、パーリ語 jhāna (ジャーナ) の音写である「禅」という語と、その意味をとって訳した「定」という語を複合したことばです。語義は、心静かに瞑想し、真理を観察するということです。またそれによって心身ともに動揺することがなくなり、安定した状態をいいます。

道元禅師の『正法眼蔵』(八大入覚)に、「三つには楽寂静。諸の憤鬧を離れ、空閑に独処す。楽寂静と名づく」とあります。ちなみに、「楽」は願うという意味です。また、親鸞聖人も『教行信証』(顕浄土真仏土文類)において、『涅槃経』を引用し、「涅槃の性これ大寂静なり。なにをもつてのゆゑに、一切憤鬧の法を遠離せるゆゑ

に。大寂をもつてのゆゑに大涅槃と名づく」と記されています。

ここで、「憤鬧」というあまり見慣れない文字が出てまいります。「憤」は、心乱れるという意味です。「鬧」の部首「鬥」は、とうがまえとか、たたかいがまえといつて、その字形は武器を持った二人がたたかう様子を象つたもので、やかましいとか、騒がしいという意味になります。

要するに、内的には心のざわつきや乱れ、外的には騒々しさから解放しようとするのが禅定であり、そこから解放された状態が寂静、そして、すべての憤鬧から完全に解放されたとき涅槃というのであります。

ところで、茶道において、その心得として「和敬清寂」(四規)ということがいわれます。お互い

仲良く(和)、敬いあつて(敬)、見た目だけでなく心も清らかに(清)、何事にも動じない心(寂)を持って、お手前をするときも、お茶をいただくときも心がけなさいということです。

茶道は、仏道、とりわけ禅との関わりが深く、和敬清寂の「寂」は、この禅定に通じるものであります。そして、留意すべきは、「寂」は、和・敬・清と別個に切り離されてあるものではないということです。つまり、「寂」は、ただ己一人が心静かにして居ればよいというのではなく、和・敬・清の心得が整つて、初めて実現できるということでもあります。

また、武道においては「動中静」ということが求められます。確かに、剣道や柔道の達人というのは、動きがどっしりしています。鍛錬

によって、どんな場合にも対応できるだけのものを持つているからでありましょう。このことは、よく、独楽こまに譬たとえられます。独楽は勢いきほいよく回まわっているときは、あたかも止とまっていないように見えます。バタバタ、ドタドタするのはしっかりと回まわっていないからで、要は、不完全、未熟であることに他なりません。

茶道においても、武道においても、「寂・静」ということが求められますが、それは芸道探究の目標点であります。仏道においての「寂静」は、真理探究の目標点であります。目標に向かって、芸道は日々稽古といわれますように、仏道においても、日々、仏法に耳を傾け、禅定波羅蜜に心がけることこそ、肝要なのであります。

現代人は喧騒の中で生活してい

ます。常に不平不満を抱かかえ、声が大きく方が勝ちとばかりに、声を張り上げ、我鳴りたてています。また、不安や怖おそれからか、あえて喧騒の中に身を置き、一時の忘却に現うつつを抜かしております。しかし、心の平安、仏教用語では「安心」を得ようとするとするならば、禅定波羅蜜なくしてありえません。

具体的には、詳細は省きますが、釈尊が最初の説法（初転法輪）で説かれた「四聖諦」（苦諦・集諦・滅諦・道諦）、そして、根本教理である「三法印」（諸行無常・諸法無我・涅槃寂静）の体得にあります。この仏法の智慧は、禅定波羅蜜によって育はぐまれます。

ただ、『維摩経』に、面白いエピソードがあります。

釈尊が、智慧第一といわれた舍利弗に、病で伏している維摩を見

舞うように命じられます。ところが、舍利弗は、「維摩居士のところ行くことだけは許していただきたい」というのです。弁解の理由はこうです。

あるとき、林の中で坐禅をしていたときです。維摩がやってきて、「坐禅とは、林の中だけでするものではない。日常の振る舞い、世間のつとめを果たしながら、悟りへの道を実践するのが本当の坐禅である」といわれ、返す言葉がなかったというのです。

つまり、俗世間から離れるのではなく、むしろ、積極的にかかわる中で、宗教的境地を求めよというわけです。これこそ大乘仏教の基本スタンスであり、大乘仏教における禅定波羅蜜がいかなるものかを考える上で、重要な示唆を与えてくれています。

◎蒲団ふとん

「布団」と書く場合もあるが、あれはあくまで当て字。もちろん、寝具を指すことばだが、実はこれ、元来は坐禪に用いた敷物のことを意味した語なのである。

本来、「蒲団」は丸いものだった。つまり、「団」とは、いろいろなものを集めて丸くしたものをいう。たとえば「一団」。これは、多くの人間が集まって一つの固まりになることを意味する。同じように「団子」も、丸い固まり状のものを指すことばというまでもない。

そこで蒲団である。蒲とは、水草の蒲がまのこと。この蒲を干して丸く編んだのが蒲団だ。もちろん扁平でかたく、こんなものの上では安眠は不可能。僧侶たちは、この蒲団を坐禪の際に座る席としたのである。別名「坐蒲ざぶ」。

現在我々は、座る蒲団のことを「座蒲団ざぶとん」と呼ぶが、元来の蒲団とは、この座蒲団のことを指すのだ。

ちなみに、インドの仏教修行者はこの蒲団を用いない。彼らが座るのは長方形の布地の敷具。しかし、この長方形という形状のほうに似ているのだからおもしろい。

◎手巾てまぎん

手ぬぐいのこと。これもまた仏道修行に必要な十八物の一つで、手や顔をふくために持ち歩くことが許された。もちろん、布はすべて使い古しを用いるのが原則。現在の雑巾ぞうきんといったほうがふさわしいかもしれない。「手巾」は、釈迦の弟子迦葉かしょうが、山から下りるとき、汗が目に入り、目を痛めたため、釈迦が持ち歩くことを許したとされている。

大きさは不明だが、手巾は不浄のものとされ、そのため染めてから用いる決まりとなっていた。

(『仏教のことば』早わかり事典)

雑記



▼雨傘

長年使っていた雨傘の骨が、ポッキリ折れてしまいました。二十年以上も使っているとかえって愛着がわき、諦めきれず修理することにしました。

洋蘭の支柱と荷札の針金を使って悪戦苦闘の末、何とか直りました。まだしばらく使えそうです。

▼メジロ

当方の庭に、メジロがよく飛んできます。ただ、ウグイスの季節は春ですが、メジロはなぜか秋。

◆出立しゅつたつや娘この無事願い

荷繕にづくらい 沐魚